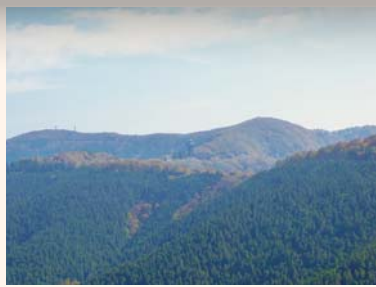


熊野の  
木林から

# 怪熊野

「龍神村の怪異(其の二)」

和歌山大学  
システム工学部  
環境システム学科  
中島敦司教授



龍神岳(左の峰)と護摩壇山(右の峰)。写真では護摩壇山の方が高く見えるが、龍神岳の方が10m高い。龍神岳はずっと名無しの峰だったが、名前を全国公募して平成二十一年に龍神岳と決まった。

旧・龍神村は、二級河川としては日本で最も長い日高川の最上流部にあり、和歌山県の最高峰、龍神岳に抱かれる和歌山の奥座敷にある。和歌山県の最高峰は護摩壇山じゃないのか？と思われた方も多

だろうが、護摩壇山の東の峰の方が10メートル高いことを国土地理院が見つけ、名無しの峰だったため、名前を全国公募して

平成21年に龍神岳と決まった。

このような山奥の龍神には、数々の妖怪話が伝わる。例えば、巨大化した溪流魚のアマゴが美しい女に化けて木こりなどを「泳ごうよ」と誘っては喰



「がたろう淵」の河童の話が伝わる大熊の龍蔵寺。河童にまつわる話の舞台であるため、河童寺と呼ばれている。

（く）らう「ゴサメ小女郎」、巨木を切りに来た木こりの寝間に現れて枕をひっくり返して命を奪う「枕返し」、平安時代の陰陽師、阿倍清明による数々の奇跡などの話を過去のコラムで紹介した。

それらの他、例えば、龍神の川には人面蛇身の底主人(そこうず)がすみ、それが出た付近では水が白や赤に濁ってしまい、魚が1匹も捕れなくなるという。宮代の立花川の弓木滝では、牛のふんなどの汚物を投げ入れると豪雨になるといわれる。滝の主である大蛇の仕業だといわれるが、滝に汚物を流す雨乞いの話は紀伊半島西部の各所にあり、龍神では小又川の七つ釜や丹生ノ川にも類話が伝わる。坊垣内の杉木谷池には、古くから池の主、白髪の池婆(いけばば)がすむといわれてお

り、池を汚す者への戒めとしていた。いずれの話も土砂災害との関係がイメージされる怪異だ。

大熊には「がたろう淵」の河童(かっぱ)の話が伝わる。この「がたろう」自体が河童を指す言葉であり、主に紀北はじめ大阪、奈良の真言宗の勢力下に多い呼び名だ。曹洞宗、臨済宗の多い紀南の河童はカシヤンボやゴロンボ、あるいはそれらに似た呼び名であることが多い。当時の情報伝達の範囲として、龍神が紀北よりだったことが分かる。この「がたろう淵」の河童であるが、手に負えない悪さに怒った領主に退治された際「龍蔵寺に松の木が生えるまで悪さをしない」との約束を石に刻んで龍蔵寺の庭に埋めたという。その後、河童の約束は守られ、皆が河童のことすら忘れた頃、2本の松が生えてきたため、河童の悪さは復活したが、松を切ったため、今は大丈夫のようだ。

**中島敦司(なかしまあつし)教授プロフィール**  
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

